



ガチャ から始まる
錬金ライフ vol. 2

GACHA KARA
HAJIMARU
RENKIN LIFE

著 盾乃あに ill. aoki

● 主な登場人物 ●



???

ロシアの暗殺者。
アーシャとは仲間
だったようだが……？

きさらぎ
如月

冒険者御用達の店
『プライド』の店長で、
ヤトの良き理解者。

すだみらい
菅田未来

ヤトを守るために
国家安全保障局から
派遣された女性。

アーシャ

ロシア人の少女。
ヤトのスカウトを
試みていたが……？



テン

ヤトが魔界から召喚した
ピクシーキャット。
ビール好き。

たちばな かれん
立花可憐

ヤトを慕う十代の女の子。
火魔法が得意。
言いたいことははっきり
言うタイプ。

かわち やと
河地夜人

本作の主人公。底辺日雇い
冒険者をしていたが、
『ガチャ』スキルを得たことで
人生が激変する。
ビール好き。

1 帰ってきたら

「錬金もやっとなかないとな」

低級ポーションを二百本、中級を五十本と上級を五十本作り、初めてスキルボールを作ってみる。素材は、蟠桃ばんとうとスキルの種と新聖水。新聖水は聖水をもう一度錬金すればできたからそれで作るかな。

スキルの種は、六十階層で得た騎士と弓師。できたスキルボールは、他と少し違って虹色にじだった。

騎士のスキルボール（若返り五歳）
弓師のスキルボール（若返り五歳）

鑑定で見ると、若返り五歳とかいう副作用が書いてあったが、これはどうしようかな。まあ、これもオークシオンだな！



久しぶりにプライドに行くとか如月きづきが待っていた。

「お帰りなさいませ。今回は長かったですね」

「おう。それなりにいいものが手に入ったよ」

「それはよかったですね！ ではこちらに」

如月に促され、いつものカウンターに座る。ポジションをゴソソリ出していく。

「長くて悪かったな。でも作ってきたから」

「いえいえ。作ってもらえることがありがたいですから」

如月は笑みを浮かべて言う。

「低級が二百、中級が五十、上級が五十あるから確かめてくれ」

「はい。それでは」

如月は喜んでいるようで、ニマニマしながらポジションを分けている。

「あ、あとTSポジションと視力ポジションはありますか？」

「あるぞ。いくつ欲しいんだ？」

「TSポジションが十本と、視力ポジションが二十本ですね」

「あつたかな？」

マジックバッグをあさると、なんとかあつたな。

「ありがとうございます！ 予約されていく方が多くて」

「TSポジションもか？ まあ、コンプレックスはあるだろうな」

「そうですね。私は視力ポジションがありがたかったですね」

そういえばそうだったな。

「それから、オークションをまたお願いしたいんだが？」

「それは……またスキルボールですか？」

俺は、出品したいアイテムを如月に伝えた。

「……今回は冒険者がこぞって集まりそうなラインナップですね。しかも目玉のスキルは鑑定！
これはアメリカが獲りに来るでしょうね！」

やはりアメリカが来るよな。

「やつぱり？ 出さないほうがいいかな？」

「いえ、出してしましましょう！ 私のところでは売れないですから」

プライドで売るのも危ないからな。

「そうか、わかった！」

「しかも、五歳若返るスキルボールも」

まあ、作ってみてからわかった副作用なんだけだな。

「な！ 作ったらそうなったからビックリだよ」

「ええ!! 作ったんですか!? スキルボールを!？」

「まあな！」

「さ、さすがですね」

「スキルの種が必要だし、他の素材も貴重だからいっぱい作れないけどな」

「たくさん作ったらやばいですからね？」

「だな、気をつけるよ」

如月に任せて店をあとにする。



屋間の道を散歩がてらスーパーに向かい、食材をがつり買ってから家に帰る。
道の真ん中に女性!?

「……アーシャ？」

「ヤト、あなたのせいでクビになったわ！」

「俺のせいだよ！」

「あなたのせいでしょ！ せっかくの錬金術のスキルボールも手に入らないし！」

「それは国の問題だろ！」

アーシャをよく見ると傷だらけだ。

「逃げてきたのか？」

「……そうよ、追手に追われてどうしようもなくなった。どうせ殺されるから、死ぬ前にあなたに文句が言いたかったの！」

そう言うアーシャは涙を浮かべ、

「それだけよ！ じゃーね」

と後ろを振り返った。

「はあ、上がつていけよ！ 俺の前で死ぬとか言うなよな！」

しょうがないから無理やり手を取って、部屋に入れた。

ポーションを飲ませてからシャワーを浴びさせる。

「着替えはそこに置いてあるからな。男物だけど我慢しろよ？」

俺は何をやってるんだろ？ と思いつつビールを開ける。

「あ、上がったわよ」

「そうか、ブフツ!! 着替えは置いてあっただろ」

タオルを一枚巻いて出てきたアーシャを見て噴き出した俺は、着替えるように言う。

「私を連れ込んだのはこういうことじゃないの？」

「違うだろ！ いいから着てこい！」

アーシャの背中を押して着替えさせる。

「で、どういうつもりなの？」

着替えて座っているアーシャが聞いてくる。

「あんな、死に行きますって奴をほっとけるわけないだろ！ いいから飲め！」

「……わからないわ」

と言いながらビールを開けて飲み干すアーシャ。

「飲めるね？ まだ飲むか？」

「こんなの水と一緒によ！」

やけ酒だな。

しようがないからつまみを作り、ビールを飲む。

酔って腹も膨れて安心したのか、寝息を立てるアーシャに毛布をかけてやる。

こんなことになるなんてな。さあ、アーシャはどうしようかな？ とりあえずはここにかくま匿ったが、

これからだよなあ。

目立つ見た目なんだよなあ。

姿を隠せるハイドコートでも着せるかな。ネット通販で素材を買って、とりあえずハイドコートを作る。まあ、これでバレないとして。

窓から外を見ると、追手らしき影。

「やっぱり外にいるなあ。どうしたもんかな」

そうだな、俺がハイドコートを着て倒すか！

俺はハイドコートを着て周りにいる追手を倒した。さらにみぐる身包み剥いでいく。

パンツだけは残してやる。

ようやく全員片付けたので部屋に戻る。

「……どこに行ってた？」

「ん？ 追手は全員片付けたぞ？」

「は？ レベルはこれまでより高いわよ？」

ビックリするアーシャ。

「それはまあいいだろ？ 身包み剥いどいたから、レベルが高かろうがどうしようもないと思うけどな」

俺は、追手から奪った防弾着や銃などをドサドサと置いていく。

「通信機も奪ったから、あとはどうにでも生きていけるだろ？」

「……ヤトのパーティーに入れてくれないか？」

いきなりそう言うアーシャ。

「なんで？」

「そこが一番安全そうだからな」

「……みんなに聞いてからな」

「ちなみに私は、スナイパーだ」

弓師の上位職か。

「ならどこでもやっていけるだろ？」

「いや、私がヤトのパーティーに入りたいんだ」



真剣な目で話すなあ。

「わかったが、他のメンバーに聞いてからな？」

「ありがとう」

2 アーシャ

とりあえず一泊させたが、あまり泊めるのもやばい気がする。なので、さっさとカレンたちに連絡をする。

カレンと話し、とりあえず明日プライドに集まることになった。プライドには悪いけどちょうどいいんだよな、待ち合わせ場所に。

アーシャの服は洗ったが、かなりボロボロになっているので買いに行くことに。

「適当に選べよ？」

「私も自分で金は持っている」

「なら心配ないな」

アーシャに買い物をさせてる間に、自分の服を見る。俺も筋肉質になったのか、胸回りがきつい服があるんだよな。

とりあえず二人で服を買い、アーシャは今風のパンツルックに着替えている。まあ、綺麗なアーシャはなんでも着こなすよな。

その後、アーシャが髪を切りたいと言ったので美容室に連絡して予約を取る。

「綺麗な銀髪なのがいいのか？」

「ああ、アーシャは死んだものとしてくれればいい」

「そっか」

予約時間に連れていき、俺は喫茶店に入ってゆっくりする。

しばらく待っていると、髪を切り終えたアーシャが戻ってきた。

「サッパリしたよ！」

「おまつ！ 似合ってるけど切りすぎじゃないか？」

まさかのベリーショートだ。

「これでいい。なんなら髪色も変えたかったが止められた」

「だろうな」

まあ、気に入ってるならいいか。

あとは部屋だな。

不動産屋に行って近場の一人暮らしの物件を探してもらおう。

2DKでいい物件があったので見に行くと、アーシャも気に入ったようでここにするらしい。

即入居可能だから鍵を渡される。

そのあと家具を買いに向かうと、カレンにばったり会う。

「よお！ カレン！」

「ヤト!? ん？ その綺麗な人が新メンバー？」

カレンはじっくり見てくる。

「そうだ。アーシャだ」

「よろしくお願いします」

猫を被ってるな、アーシャ。

「よろしく！ かわいいね！」

「カレンより年上だと思っぞ？」

スーツを着てるアーシャしか見たことなかったが、こうして私服姿でカレンと並ぶと幼く見えるな。

「そうなんだ！ でも仲間になるんでしょ？ いいじゃん！」

「カレン、よろしく」

「こちらこそよろしく！」

と、ここで急におばちゃんが入ってくる。

「あら、カレンの友達？」

「パーティーメンバーのヤトと、今度入るアーシャよ」

「あらあらまあまあ、いつもカレンがお世話になって！
カレンのお母さんだった。

「こちらこそお嬢さん連れ回してすみません」

「いいのよ！ 無事に帰ってくれば！」

「はい、怪我はさせませんので」

怪我をさせてもすぐ治すからな！

「うん！ 頼りにしてるわね！ ヤトさん！」

「はい！」

カレン親子と別れる。アーシャが表情を変えずに言う。

「いいお母さんね」

「そうだな、アーシャは親は？」

「いないわ、孤児だったからこんな仕事させられてたの」

「なら俺と一緒にだな。両親は亡くなってもうだいたい経つからな」

うちの家族はダンジョンのスタンピードに巻き込まれた。そうして車の下にいた俺だけが助かったのだ。

まあ、親戚もないし、俺も孤児と変わらないかな。そもそも育ったのも孤児院だしな。

「あと、私はもう二十五だから」

「おう、若く見えるのはいいことだな」

「ふう、そういうつもりじゃないんだけど……」

含みのある言い方だな？

「なんだ？」

「別に！ 家具を買うわよ！」

「つたく、はいはい」

家具、家電を買ってから、アーシャの新しい部屋に運び込んだ。

言われた通りに配置をする。

「じゃあ、明日プライドに九時だな！」

「了解……ありがとう」

「おう！ んじゃな！」

はあ、やっと終わった。まさか一日中アーシャといるとはな。アーシャの新居から出る。ようやく帰れると思いきや。

「はあ、なんか用か？」

「さすがだな、俺がバレるとはな」

物陰から出てきたのは男。ゴツい武装をしている。

「そりゃね、背後から近寄るなんてな」

「悪かったな。俺たちはお前に手を出せないからな」

「そうか、ならなんで？」

「アーシャを頼むな！」

任務を遂行できなかったアーシャの周りには敵しかいなかった。てっきり一人だと思っていたが、こんな奴もいるんだな。

「……そっか、あいつにも味方がいたんだな」

「まあ、お前が保護しなかったら死んでたんだがな」

おー、間一髪ってどこか？

「……ふう、名前は？」

「俺か？ 俺はアジーンと呼ばれている。ロシア語で『1』。ただの番号だ」

「そうか、アジーン、これやるよ！」

ポーシオンを投げ渡す。

「ポーシオンか？」

「上級ポーシオン、お守りだ」

訳がわからないって顔してるな。

「……」

「お前は死ぬなよ？」

アーシャは死を覚悟していた。こいつからも同じ匂いがする。

「悲しむ奴はいない」

「俺がいる」

「……ハハ、変な奴だな」

確かに変だな。

「お互い様だ」

「それじゃあな」

「ああ、またな！」

アジーンはそう言って去っていった。アジーンは本当はアーシャを助けたかったから、俺のどこまで来たんだろう。

そんな奴が悪い奴とは思えない。

また、どこかで会ったら飲みながらしゃべってみたいな。



次の日にプライドに行く。

アーシャはもう来ていた。戦闘服のアーシャに俺は尋ねる。

「どこに行く気だ？」

「ダンジョンには行かないのか？」

「ただの顔合わせだぞ？」

「力量は見るだろ？」

「んー、どうかな？」

しゃべっていると如月がやってくる。

「河地様、おはようございます」

「如月、おはよう。ごめん、また待ち合わせに使っちゃった」

「気にしないでください、それに、中で待ってもらって構いませんよ」

「ならそうしよう」

二人でプライドの中に入る。

すでに結構客が入っていた。俺とアーシャは商談用のソファースセットに案内される。如月が耳打ちしてくる。

「オークションのことはまだオフレコでお願いしますね」

「あはは、メンバーは知ってるぞ？」

「それは問題ないです」

如月はそう言って戻っていった。

アーシャが尋ねてくる。

「またオークションをするのか？」

「ああ、今度は、錬金術のスキルボールはないけどな」

「何を出す？」

「鑑定だな」

驚くアーシャ。

「なっ！ また貴重なスキルボールか！」

「鑑定できる人間は多いだろ？ 別に構わないんじゃないか？」

アーシャはため息をつく。

「鑑定は冒険者なら誰もが欲しがらるスキルだ」

まあ、そうかもな。

「でも、これもあるからな」

「ん？ ゴーグル？」

「着けて見てみるよ」

アーシャは着ける。

「な！ な！ はあ？ なんてものを」

「な？ それがあるからなんとでもなるんだよ」

鑑定ゴーグルだ。

「量産は可能なのか？」

「いや、今はそれ一個だな」

あとはプライドに一個、モクレンが一個、冒険者パーティーのブルーオーシャンに一個で全部で四個だな。

「そうか、こんなものがあつたとはな」

「だから、鑑定なんてなくても平気なんだよ」
カレンたちが外に見えた。

3 歓迎会

カレンたちが店に入ってきた。
ソファアに座りきれないな。

サツと椅子を持ってきてくれる如月。会釈えしやくをしてまた持ち場に戻っていった。

「んじゃ、カレンはすでに会ってるからカレン以外を紹介するよ。シオンは騎士に、カエデは剣士、モクレンは回復に魔法だな」

「私はロードナイトで、カエデはクルセイダーだ」

シオン、わざわざ言い直さなくてもいいのにな。

「はいはい。んで、こっちがスナイパーのアーシャだ」

俺が紹介すると、アーシャは立ち上がる。

「アーシャと言う、よろしく頼む！」

「よろしく！」

「ルベルに入るんだね」

「ルベル？」

「俺らパーティーの名前だよ」

モクレンが意味まで教える。ラテン語で『赤』という意味だ。

「赤か、いいな」

「んじゃアーシャも入ったことだし、今すぐどつかで歓迎会しようよ！」

「ん？ ダンジョンは？」

アーシャが尋ねる。ダンジョンで実力を試すっていうのが前提だったからな。

「いいよ、ヤトが連れてきたんでしょ？ なら大丈夫」

「……信頼されてるな」

「ん？ 信頼？ 違うよ。確認なんてあとでできるから、歓迎会しただけだろ？」

俺がそう言うと、カレンが答える。

「あつたりー！」

やっぱりかよ、まあ、こんな気楽な感じだから楽なだけだな。

それにしても今はまだ昼だろ？

「どこでやるんだよ？」

「そうね、私はもう学校もないし、でもお酒飲めないからなあ」

「ん？ いつの間に学校辞めたんだ？」

「ちゃんと卒業したの！ 今何月だと思ってるのよ！」

まだカレンは学生だと思いついて入ったが、よく見ると化粧してるしそうかあ。
「ヤトの家は？」

「ばっか！ こんな人数だと」

「大丈夫でしょ？」

カレンが言うが、

「迷惑だ！」

「決定！ ヤトの家！」

結局押しきられて、俺の家になってしまった。

カエデ、シオン、カレンは初めて来る。そりゃ楽しそうだわ。



いろいろと買い込んで俺の家に来る。

「はあ、最悪だな」

俺は頭を抱える。

「へえ、いいところ住んでるじゃないの！」

「オートロックだ！ 早く開けてよ！」

「うるさい！ 静かにしてくれよ？」

カレン、カエデが騒ぐ。大人六人だからな。本当に静かにしろよな！

「ここだ。入ってくれ」

「おっ邪魔しまーす！」

「黙って入れよ！」

「あはは」

モクレンは苦笑いだな。

女性陣が先に入る。

「うおー！ 綺麗にしてある！ それになんか大人！」

「ソファァーがデカイ！ 部屋広いし！」

「こっちにデカイ壺がある!!」

カレン、カエデ、シオンが勝手に部屋の探索を始めた。

「だー！ それは錬金釜だ！ あとそっちには入るなよー！」

「フリ？」

「フリってお笑いの、逆にやれって意味のフリか？ フリじゃねーよ！ いいから座れ！」
騒ぐ騒ぐ。

で、準備が終わり、歓迎会の開始。

「じゃ、アーシャの加入にカンパァーイ」

「カンパァーイ」

アーシヤはビールを飲みながら俺に聞く。

「カンパイ？　これがこっちの伝統か？」

「違うぞ？　宅飲みで歓迎会なんか普通やらん！」

カレン、カエデの二人はノリノリだ。

「いいじゃん！　テレビつけよ！」

「あ！　ブルーオーシャン！」

変な盛り上がり方だな。

ピザを買ってきてある。ピザを食いながらみんなで駄弁る。

駄弁りつつ、今度の活動の打ち合わせ。

「あ、オークションは頼んだからな？　取り消しはなしだぞ？」

「いいよー！　今回は六人で売上を分けるのよね？」

「そうだ。まあ、今回の目玉は、鑑定スキルボールだけだがな」

「鑑定？　あ！　またなんか出したの？　何!？」

「まあいろいろだな。その日のお楽しみだ」

「えー！　欲しいやつかもしれないじゃん！」

「高くて買えないぞ？」

「ぶーー！」

ブーブー言いやがる。

話は変わってアーシヤの武器について。

「あ、アーシヤはスナイパーなんだよね？　武器は？」

「これだけど」

使い込んだ弓を取り出すアーシヤ。

「ヤト？　弓はないの？」

「んー、あったかな？　お、大鷲の剛弓と妖精の弓だな」

「絶対妖精の弓でしょ？」

「うっ……く、そうみたいね」

大鷲の剛弓を引こうとしたアーシヤだったが、無理だったようだ。

「矢は必要ないようだな。弓を引くと魔力の矢ができるみたいだ」

「そうなの？」

弓を引こうとするアーシヤ。

「今引くなよ！　矢が出ちゃうからな!!」

「わかった……ありがとう」

妖精の弓を柵の上に置いておく。

それから時間は過ぎてようやく居酒屋が開く時間帯だ。

「よし！　移るぞー！」

「えー！　ここでいいよー！」

「んなこと言って寝る気だろ！ ほら起きて行くぞ！」
全員でタクシーを二台呼んで居酒屋に行く。



「「カンパイ」」

シオンとカレン、モクレンにアーシャと俺は大丈夫だが、特攻隊長のカエデはすでに寝てしまっている。

「ヤト、彼女は？」

「ん？ 昔はいたぞ？」

「そうなんだ！ 今は？」

「ここで飲んでるんだ、いるわけないだろう？」

むしろおっさんだ、嫁がいてもおかしくないだろ。

「顔もまあまあで金持ってるなんて良い物件だと思うけどなあ」

「あ！ 変な趣味があるとか？」

「あるか！ やめろ！ 俺を詮索するな！」

「あはははは！」

そうして歓迎会の二次会は続いていく。

夜も更ふけ、ようやくまったりしてきたところだが、帰ることにする。

「おら、タクシーに乗れ！」

「うーっす！ では！ またのー！」

「ああ、またな！」

カレンがカエデの家を知っていてよかった。

次のタクシーにシオンとモクレンが乗る。シオンが尋ねてくる。

「あれ？ アーシャは？」

「こっから近いから送っていくよ」

「送り狼にならないでよね？」

「なるか！ じゃーな！」

「お疲れ様！」

モクレンだけはわかってくれたようだな。

アーシャと俺の二人だけになって、アーシャが言う。

「今日はありがとう」

「いや、あいつらがしたかったからしょうがない」

月が綺麗だなあと見ながら歩く。

「私は初めてこんなことをした」

「ん？ 軍隊ではなかったのか？」

「そうだな、なかった」

「んじゃ最初のテンションは作ってたのか」
最初からこんなしゃべり方じゃなかったからな。

「そうだ」

「まあこれからゆっくりしていけばいい」

「そうか……そうだな」

まあ、今は笑えないかもしれないが、そのうち笑えるようになるさ。

アーシャを送って、俺も家に帰る。

「……汚い……ちゃんと掃除してけよな！」

帰ってきて改めて家の様子を確認して愕然とする。しょうがないので酔って気分がいいのに掃除から始める。

しばらくして、これようやく落ち着いて飲めるなというところでスマホが鳴る。

「もしもし？」

『あ、河地様、如月です』

『おう、どうしたんだ？』

『それが……「黒い宝石」から連絡がありました』

『何それ？』

『S級パーティの名前ですね』

「へえ、黒い宝石ね」

『よければ、河地様に会いたいと』

また如月経由でのアポイントか。ブルーオーシャンのときもそうだったな。

「んー、明日ね！ わかった」

『ありがとうございます。明日の午後に来るそうなのでよろしくお願いします』

『あ、他のS級パーティの名前ってわかる？』

ずっと気になっていたので、このタイミングで聞いてみた。

『はい。「グリード」「黄金騎士」「バード」ですね』

『わかった！ 覚えておくよ！』

『はい！ では明日お待ちしております』

4 黒い宝石

プライドに行くなら納品しなきゃだが、とりあえずポーション類はオツケーで、ガチャを回しとこうかな？

十一連でガチャを引く。ガチャガチャ。

赤が一、青が四、紫が三、銀がなし、金が三だ。最近虹が出てないな。

赤は、

上級ポーション

青は、

リベンジガード

大太刀・桜舞^{おうぶ}

クナイ・逆光（自動転送）

青龍刀

クナイは投げたら戻ってくるみたいだな。

紫は、

ウエボンリング

士魂の指輪^{しこん}

隼^{はやぶさ}のネックレス

金は、

スキルボール（投擲^{とうてき}）

スキルボール（魔法剣士）

マジックバッグ（大）

へえ、魔法剣士なんて上級職もスキルボールがあるんだな。

まあ、変わり種も手に入ったしプライドに向かうか。



プライドが見えてきたが、人だかりができてるな。

「あ、河地様！こちらです」

如月に呼ばれたので、人だかりに割って入っていく。

「なんだ？この騒ぎは？」

「それが……」

言いくさそうにする如月。商談のスペースに座っている男が立ち上がる。

「俺らのせいだ、悪かったな」

「いえ、黒の宝石の皆さんは買いに来たお客様ですから」

如月が言う。

「はいはい、で？ そちらが錬金術師さん？」

黒の寶石のメンバーの一人らしき女性が話しかけてくる。

「ん？ さあ？ 錬金術師かどうかはさておき、河地と申します」

「そう、私はこのパーティーのリーダーの黒木真夢よ」

メンバーの一人かと思つたが、リーダーだったか。黒いドレス姿の妖艶な女性だ。

「俺はアタッカーの、桜田零士だ」

さつき声をかけてきた男だ。はっきりした顔のイケメンって感じだな。

「俺はガードナーの、兵藤源だ！ よろしくな！」

人懐っこい笑顔のおっさんだ！ 好感が持てるな！

「わ、私は臼井奏です！ ヒーラーです」

どもりながらしゃべるのは黒いフード付きコートの女の子だな。

「で、俺っちが斥候の岩井國男だ」

同じ斥候だが、背が低くどちらかと言うと猿のイメージに近いな。いや、悪い言い方だ。小柄な

黒い防具の男だ。

俺から話を切り出す。

「よろしく。黒い宝石さんが会いたって言うので来たんですが？」

「そうよ、私たちはこれからブルーオーシャンが踏破できなかったダンジョンに行くの！ だから

ついでに来てくれない？」

ぶっちゃける黒木。

「無理無理！ 俺なんかが行ったらすぐ死んじゃうよ！ それは無理だ！」

いきなり何を言い出すかと思えば。

錬金術師を連れていくメリットはないだろ！

「ふう、それもそうね。そこまでレベルが高いとは思えないし。連れていくのは諦めるけど、ポー

シオンはある？」

「ここにも卸してるが？」

「低級ポーシオンはいくらあってもいいわ！」

如月を見る。もうない、というジェスチャーをする。

俺は思い出したように言う。

「ああ、低級ポーシオンなら百本は持つてきてたな」

「それをもろうわ！ あと上級は？」

「十本だな」

「それももろう。他に何かあるの？」

んー、上から目線だな。面倒くさいが、ダンジョンで死なれても気まずいし。

「じゃー、まずはアクセサリーだな。これだけあるが」

それから商談スペースに行って、テーブルに出す。

「如月は鑑定で教えてあげてくれ」

「はい！ ではこちらから」

黒い宝石は真剣に聞いている。しばらく見ておくか。

「そうね、これとこれは私がもらうわ！」

「このウエボンリングがいいね！」

「AGIが上がるのはいいな！」

みんな思い思いに手を出している。

如月は電卓を叩いている。

「次は武器かな？」

俺はそう口にして、武器を出していく。

「[[おお!!]]」

「とりあえずこんなところだな」

黒木が声を上げる。

「如月！ 説明を！」

「はい！」

如月に任せてしまい悪いな。

「私はこれをやめてこっちにするわ！」

「俺もこれじゃなくてこっちの剣で！」

また如月が電卓を叩く。

「あとは防具か、そこまでないけど」

一応あるものを出していく。

如月が説明していくと、黒い宝石の面々は目を輝かせていた。

黒木が尋ねる。

「全部でいくらになるかしら？」

「70億になりますね」

「そう、これで払うわ」

ブラックカード、S級のカードだな。

「はい！ 河地様も」

「あ、はいはい」

如月に言われてカードを渡す。これで俺に振り込まれる。

斥候の岩井が首をかしげる。

「C級？ もっと上でもよくないか？ あんた、レベル60はあるだろ？」

「……なんでそれを？」

勝手に鑑定か？

「身のこなしとオーラでだいたいわかるさ」

鑑定はしてないか。まあ、信じよう。

俺は首を軽く振って答える。

「まあ、俺はこれくらいいいんだ、危ないことはしたくないんでね」

「そっか、そら仕方ねえな！ そうだ、マジックバッグは持ってないか？ デカいのがいいんだが」

「これでいいか？」

マジックバッグ（大）を渡す。中を見て嬉しそうに親指を立てる岩井。

「では、72億になります」

「いいわ！ いい買い物ができたわ！ ありがとう」

上から目線な態度ではなくなつたな。対等に接してくれている感じはある。

「こっちこそお買い上げありがとうございます」

「ウフフ、また帰ってきたらよろしくね」

黒木がそう言うと、岩井が全部マジックバッグに入れる。そうして彼らはプライドをあとにした。

如月が頭を下げてくる。

「突然すみません」

「いいよ、買ってもらえたんだし。ダンジョンで死なせたくはないしね！」

「はい！ いい人なんです、舐められたくないらしく、最初はああいう感じでして」

「あははは、S級なんだから誰も舐めた真似しないだろ？」

「いや、最初は酷かったみたいで」

リーダーが女だからか？

まあ、いろいろあつたんだろうな。

「そうなんだな。ところでオークションのことは？」

「言つてありますよ。たぶんそのあとでダンジョンに潜ると思います」

そっか、なら欲しいものがあるかもしれないな！ マジックテントとかな！

これで、二つのS級パーティーに会つたことになるな。今後、素材を持ってきてくれるといいんだがな。

それに、金は増えていく一方だから何か考えよう。

貧乏性だから豪遊できないのがつらいな。

5 オークション2

約二週間後。暖かい季節になってきた。

俺はいつもの調子でダンジョンに行ったり、ガチャを試してみたり、あとはカエデのために剣も作つたな。

プライドではいつものように如月にポジションを卸してるが、海外からも大量の注文が来ているようで、なかなか大変なようだ。

俺もそれに応えたいが、いかんせん素材が必要だからな！



で、ようやくオークションの開催日となったわけだが、この前のように横浜まで行かなければいけない。

「如月、悪いな！」

「いいえ。運転手もウチの者ですし、ブルーオーシャンが持っている車みたいに立派ではないですけどね」

如月がレンタカーを借りて、俺らを横浜まで連れていってくれる。

みんな、ドレスやスーツを着ているから別人のようだな。車の中は異様な雰囲気だ。

「レッツゴー！」

カエデは真っ赤なドレスを着ている。シオンは紫に赤が差し色になったドレス。カレンも白に赤い色が入っている靴を履いていた。

アーシャはレディーススーツだが、靴とピアスは赤色。

俺もネクタイピンとピアスは赤だ。モクレンも赤いネクタイで決めている。

みんな、どこかしらに赤を入れているな。

まあ、一時間くらいのドライブだ。

ホテルに着くと、案内されてまたプライベートルームへ。
ここで商品の受け渡しをする。

「では、これでよろしくお願いします」

「はい！こちらこそよろしくお願いします！」

係の人が、俺が提出した商品を嚴重な箱に入れて持っていった。

モクレンが尋ねてくる。

「なあ、テントを出してよかったのか？」

「まあ、新しいテントはまた今度な！」

まだ見せていないマジックテントを見たらビックリするだろうな。ニヤニヤしてしまう。

カレンが心配そうに言う。

「それにしても出しすぎじゃない？」

「まあ。オークションだしいいだろ？」

「んー、ヤトがいいならいいけどさ」

アーシャが首をかしげて尋ねる。

「ヤトはどこでこんなにスキルボールを」

「アーシャ、考えないようにしようか」

「あ、ああ」

モクレンに言われて、考えないようにしたアーシャだった。



「さあ、始まるぞ！」

最初は壺や掛け軸などだが、いいのかわからないのでスルーだ。最後のほうになってやっと俺の番が来た。

まずはマジックテント。テントの中にカメラが入っていき、モニターに中の様子が映し出された。驚きの声、歓声が聞こえる。

ふと視線が合ったのは、黒い宝石の斥候の岩井だった。

笑っているので頭を下げる。

結局、億で黒い宝石が買い上げた。

次からはスキルボール。俺が出品したのは五歳若返るといっておまけ副作用付きだ。騎士のスキルボールからオークションにかけられる。

どんどん金額が上がっていく。

二人のおばさまが取り合っていた。やはり女の人は年齢を気にするのだろうか。息の詰まるような接戦の末、最後に少しふくよかなおばさまが勝った。

次の五歳若返る副作用付きのスキルボールは弓師。

今回もさっきのおばさまたちが争っている！?

なぜ一つ競り落としただけで我慢できないのか？ それだけ若さはお金じゃ買えない価値があるということなのか？ いや、買えるから戦っているんだよな。

さすがにふくよかなおばさまは負けて、もう一方のおばさまが購入した。

次は普通のスキルボールだが、それでも回復という貴重なスキルだ。

このスキルボールの落札は素早く決まった。スマートな男性が10億を出してすぐに決まったのだ。競り合いが起きないのは、みんなラストにかけているのか。

そのラストは、鑑定スキルボールである。

激しい競り合いになるかと思っていたのだが、それどころではなかった。

次元の異なる、国同士の争いとなった。

アメリカが各国を抑えて競り落とす勢いだったが、ロシアがそんな雰囲気覆した。ロシアがアメリカを抑えて競り落としたのだ。

前回、錬金術のときに負けたのが悔やまれたのだろう。

それとも、鑑定で貴重な素材を集め、それをアメリカに卸す代わりに、アメリカの持つ錬金術を要求するのだろうか。

微妙なパワーバランスで、かろうじて国際的な平和秩序が保たれている感じだ。

もし鑑定、ゴーストが出れば、そのバランスが崩れて最悪戦争？
……まさかね？



オークションが終わり、横を見てみる。

パーティーメンバーの様子が明らかにおかしい。ケタの違う金額のやりとりを目の当たりにして、感情の整理ができないらしい。なぜか落ち込むカレンをカエデが慰めている。

「私、ダンジョンやめようかな？」

「カレン、まだよ！ またレア素材が出たら」

「そ、そうね！」

「というか、どんだけ儲かっているのよ！」

シオンが俺に向かってくる。

「そうよ！ いつも居酒屋ばかりで！」

「たまには高級なところ奢れよな！」

カレンにカエデまで便乗してきたな。

「ん？ 焼肉にしゃぶしゃぶも行ったろ？」

高級店に連れていけないわけじゃない。

「『そーいうのじゃない!!』」

「姉ちゃん？ ヤトのお金だからね？ それにみんなもお金持ちになるでしょ？」

モクレンの言葉で、メンバーが沈黙する。ようやく落ち着いたらしい。

しばらくして、何を買おうかと悩んでいる三人がいた。

そんな会話をする俺たちに声がかかる。如月だ。

「黒い宝石の皆さんが来てます」

「はい」

如月の背後にいたらしき、黒い宝石の面々が話しかけてくる。

「あなた、まだ持っているんじゃないの？」

「あはは、マジックテントなんてものがあるとはな！」

「驚いたよ！ あとはスキルボールな！」

「五歳若返るってどういうこと？」

みんないっぺんにしゃべってくる。訳わからなくなってるな。とりあえず、テントについては返答しておこう。

「S級パーティーにはピツタリのテントじゃないですか？」

「そ、そうね！」

リーダーの黒木も困惑気味だ。S級といえどめったに目にしたことのないアイテムなんだろうな。斥候の岩井が声をかけてくる。

「やるねえ、ヤト。うちに入らないか？」

「いや、これでもリーダーなんでね」
唐突な誘いだったが、即答で断る。

「そうか、じゃー、これで！」

「はい、ありがとうございます」

「じゃあね！」

嵐のように去っていったな。

俺はパーティーのみんなに声をかける。

「さて、帰ろうか？」

「[[[[はこ]]]]」



ようやく帰れると車に乗り込む。

しかし、発進してすぐに横から車が衝突してきた。

俺たちは回転する車の中でシートベルトを素早く切って、体の自由を確保。

戦闘体勢になる。

狭い車の中で、怪我をしている如月にすぐにポジションを飲ませ、運転手にも飲ませる。

他のみんなは外に出ていた。俺も外に出る。

複数人の刺客。そこには見覚えのある人物がいた。

「アジーンか……」

「悪いがここで死んでもらう！」

「それは無理だな。レベル差まではわからないか？」

こちらは、それぞれが武器を収納できるウエポンリングを着けている。ウエポンリングから武器

を取り出して、死なない程度に攻撃する。

「それでは俺は殺せないぞ！」

「殺すつもりはないからな！」

俺はそう答えつつ、アジーンの太ももに雷鳴の短剣を刺す。アジーンは痺れて倒れた。

これでしばらくは動くことはできないだろう。

「……殺せ！……でないともた現れるぞ！」

「お前が死にたいと思ってるなら殺してる。でも、お前は本当は死にたいと思ってるんじゃないだろう」

俺が横に動くと、そこにはアーシャがいた。アーシャがアジーンに氷のような視線を向けてつぶ

やく。

「アジーン」

「本当は俺の標的はその女だったんだが……俺には仲間は殺せない！」

アジーンは首を横に振って言う。

「……」

涙を流すアジーン。

しばらくするとアジーンはなんとか立ち上がった。俺は、そのまま去ろうとする彼に声をかける。

「おい、またな」

「……ああ、またな」

——ダーン。

銃声。

撃たれたのはアジーンだ。

俺は上級ポーションをすぐにぶっかけた！

撃ったほうを見ると、人が倒れて落ちていくところだった。

アーシャがアジーンを撃った相手を即座に倒したようだ。アーシャは表情を変えることなく弓をゆっくり下ろした。

6 それから

それから三ヶ月後。

本格的な夏になった。暑い中、俺はタクシーでいつものプライドまで行くと、如月が声をかけてくる。

「いらっしやいませ、今日も暑いですね」

「だな。ポーションは順調？」

「はい。おかげさまで！」

店の中に入ると、冷たい空気が顔に触れる。

「いらっしやいませ」

声をかけてきたのは、顔見知りの従業員だ。

俺はその従業員の名前を呼ぶ。

「よ！ アジーン！」

「あはは、私はゼロですよ」

そう、アジーンはあのあと、死んだことになっている。俺がそうしてもらったのだ。

そして今、彼はゼロとして生きている。ちなみに、アジーンが『1』という意味だったから、

『0(ゼロ)』にしかただけだ。名付けたのは俺だ。

「そうだったな。ゼロ、調子は？」

「元気ですよ」

「そうか！ ならよし！」

いつものようにカウンターに向かう。

立ち読みサンプル
はここまで

すると、商談スペースにちよこんと座ってるアーシャがいた。

「アーシャ？ 何やってんだよ」

「べ、別に？ 買い物？」

俺の質問に対し、疑問形で返答してくる。

「聞いているのはこっちだけだな。まあ、ゼロに会いに来たんだろ？」

「そんなことないわよ！」

顔を真っ赤にしている。そんなわかりやすいアーシャを放置しつつ、ゼロ相手にいつもの作業に入る。

カウンターでポーシオンを卸す。いつもの量をいつも通りに。

「ありがとうございます」

「いやこちらこそだよ。あれからロシアは？」

「なんの音沙汰おとさたもないですね」

まあ、ゼロは暗殺に失敗してあんな大衆の前で撃たれたんだ。死んだと思っただろ。

ちなみに、ゼロはいろいろ忙しくてダンジョンに行かなくなった俺の代わりにルベルに入っている。素材を調達してきてくれてるのだ。まあ、週に一度くらいだから苦にならないはず。

そして、俺はそれを買って錬金術で作ったポーシオンを卸している。まさに、夢の錬金術師生活を送っているわけだ。

ゼロは斥候寄りのアタッカーだからちよんどういいし、何より真面目だからリーダーのカレンも何

